

スタッフの教育支援として学習会を開催し、放射線皮膚炎に対するスキンケアのロールプレイを行った様子を紹介されました。調整は他職種との合同カンファレンスについて、倫理調整は意思決定支援について活動されている状況を報告されました。また、役割開発に向けた課題としては、個々のスタッフの放射線に対する知識の向上、リーダー的役割の育成、他科との交流・活動のフィールドを増やす、自身の探求、がん看護との共存・共同が必要だと述べられました。

牧谷美佳氏（環境省放射線健康管理担当参事官室）は、福島県「県民健康調査」甲状腺検査について説明し、甲状腺検査を実施する福島県外の検査実施医療機関の担当者に対するコーディネーション事例を紹介されました。甲状腺検査実施機関の担当者から、検査を行う上での疑問を話せる機会が少ないことや、受診者や保護者からの質問への対応で困っていることが調査から明確になり、研修会や意見交換で話す機会を設けられるように調整を行ったことを話されました。意見交換会の結果、省庁内に放射線や放射線による健康影響に関する知識を有する看護職がほとんどいないこと、今後の原子力災害への備えとして看護の視点をもって対策を検討していくことが必要との認識を共有したと結ばれました。

2. 先輩専門看護師からの助言

森下暁氏（長崎大学病院、がん看護専門看護師）は、勤務施設の組織の中での自分の位置づけや治療を受ける患者の経過に沿っての支援について説明され、治療内容の相談の場合、十分な情報を提示して選択できるように支援することが必要であると話されました。また、がん看護専門看護師の活動についての周知も重要であること、スタッフとの情報共有、専門看護師間の連携の重要性について強調されました。最後に、専門看護師の6つの役割についても詳しく説明をされました。

意見交換では、臨床における学習会、カンファレンスの企画に関する質問があり、考え方や課題について共有できました。

本交流集会終了後にはWEBでのアンケート調

査を行い、21名から回答を頂きました。最も印象に残った役割は臨床における実践が14名であり、放射線についての出前講座を依頼したいと回答した人は9名でした。今回のような修了した方の実践を継続して聞きたいという声もあり、次年度も引き続き修了生の活動報告を紹介していきたいと考えています。

《活動報告2》

日本放射線看護学会第9回学術集会

放射線看護モデルシラバスの活用に向けて—モデル授業 その1 放射線の基礎—

学術推進委員会では、放射線看護モデルシラバスを作成し、2019年4月に学会ホームページ上で公開しました。シラバスは、1単位版（主題：看護職に必要な放射線の基礎、放射線を用いた検査・治療、人への放射線の健康影響・リスク、放射線利用の際の被ばくに対する防護対策、放射線災害がもたらす健康と生活への影響を学ぶ）と、2コマ版（主題：看護職に必要な放射線の基礎知識、放射線を用いた検査・治療の概要と看護の基本、放射線防護の方策を学ぶ）を作成しています。それぞれの到達目標や授業内容はPDFで確認でき、モデルシラバスをダウンロードすることもできます。

<http://www.rnsj.jp/guidelines-publications/model-core-curriculum/>

今年度は、モデルシラバスの活用を促進するために、看護教員の苦手意識が高いとされる放射線の基礎知識や、放射線防護の3原則に焦点をあて、モデル授業を紹介することを目的に、第9回学術集会にてオンライン交流集会を開催しました。講師には、診療放射線技師の臨床経験があり、複数の大学等で看護学生を対象とした放射線看護教育をされている、小山内暢氏（弘前大学大学院保健学研究科・助教）をお迎えし、参加者58人の方々とともに教育方法の実際や教材等の工夫について共有する機会をもつことができました。

小山内先生がいつも行っている講義の中から、

放射線の基礎知識と放射線防護の3原則に該当する箇所を取り上げ、①放射線の単位(GyとSv):吸収線量、等価線量、実効線量の違い、②放射線防護の原則:行為の正当化・防護の最適化・個人の線量限度、外部被ばく低減のための3原則(時間・距離・遮へい)、③医療現場における職業被ばく:ポータブル撮影時における散乱線量やIVR等における水晶体防護について、講義の実際をご紹介いただきました。「実験してみました!」のタイトルでポータブルX線撮影時にはなぜ2m離れなければならないか、電離箱式サーベイメータを用いて測定するなど、視覚的に興味関心を示す工夫も教えていただきました。

また、授業を行う時に意識していることや、学生からの感想、自身の課題についてもお話しいただきました。やはり、看護学生や看護職にも苦手意識があるとのことで、「実際の物品を持参/動画を供覧する、双方向性に進行、平易な表現で、画像やイラストをたくさん用いる、反転学習を一部導入、自分の経験/研究成果を交える、資料はカラー印刷で」など、教育方法に関する具体的なアドバイスをいただきました。「これは必要なのか?」という学生からのネガティブな反応もあり、限られた時間の中でどこまで深めたらよいか考えながら取り組んでいच्छゃるとの率直な課題意識を伺うこともできました。

参加者からは大変分かりやすく、参考になったという意見が多くあり、現場でも役立てたい、活用したいという声もありました。今後は、さらに看護ケアに焦点をあてた教育内容について学ぶ機会を設けてほしいとの希望も寄せられました。学術推進委員会では引き続き、モデル授業について紹介していく予定です。

《活動報告3》

「看護職のための眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」の作成

医療法施行規則(その他、電離放射線障害防止規則や放射性同位元素等の規制に関する法律等についても)の改正にともない、2021年4月よ

り放射線診療従事者(放射線業務従事者)の眼の水晶体の線量限度が「5年間につき100mSv未満、かつ1年間50mSv未満」に引き下げられます。当委員会では、とくに医療現場で働く看護職の目の水晶体の放射線防護がより適切に行われることを目指し、「看護職のための眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」の検討を行い、2020年12月にガイドラインをHP上に公開しました。

<http://www.rnsj.jp/guidelines-publications/guideline/>

2) 編集委員会

《委員会概要》

編集委員会は、学会誌の編集と発行を行い、主に学会員皆様の論文投稿から論文掲載までの期間に関わります。また、この一連の作業が円滑に進むように編集システムの環境を整えています

《委員》

委員長:吉田 浩二

副委員長:北宮 千秋

委員:前田 樹海、三森 寧子、堀 裕子
山田 裕美子

《活動内容》

学術誌第8巻1号を3月に、第8巻2号を12月に発刊することが出来ました。現在は第9巻1号(2021年6月発刊予定)の編集作業に取り組んでいます。

投稿される皆様へ3点ご報告があります。

1. 随時掲載の準備が整いましたので、今後は採択後に早期公開が可能となりました。
2. 皆様の他職種との共同研究促進のために著者資格を変更しました。
3. 年に1回、優秀論文賞を発表することになりました。

編集委員会は、これまで以上に皆様の研究成果や情報を一早く発信し、社会に貢献できる学会誌を目指していきます。引き続き、どうぞよろしくお願い致します。

3) 広報・渉外委員会

《委員会概要》

広報・渉外委員会では、本学会の活動についてお知らせ、また、放射線に関連する様々な学術団体や団体と連携・協働をはかり、活動しております。

《委員》

委員長：桜井 礼子

副委員長：作田 裕美

委員：堀田 昇吾、小山 珠美

《活動内容》

今年度は、ホームページの充実、ニュースレターの発刊とホームページへの掲載、会員へお知らせのメール配信およびHP上での紹介などを行いました。今後も、ホームページに掲載する内容を充実し、タイムリーに情報提供をしたいと考えております。

第9回学術集会(広島)では、学術協定を結んでいる日本放射線技術学会との共同企画として、『放射線診療(業務)従事者の指定に関するガイドライン～看護職者～』の実施に向けて」を開催いたしました。

4) 国際交流委員会

《委員》

委員長：小西恵美子

委員：別所遊子、福島芳子、後藤あや

《2020年度活動報告》

国際交流委員会では、海外の読者を含めて広く学会活動を広報するために、学術集会のテーマを英語表記にして学会HPに掲載することが懸案となっていました。第一回学術集会からのテーマをすべて英訳する作業を行い、HPに掲載していただくため広報委員長に提出しました。

6月21日に開催した委員会で、学会員拡大に関して意見交換を行い、その結果を理事会に報告しました。その内容は、学会員が放射線診療、地域の保健、教育、行政など多様な場で活動していることを踏まえて、学会員にとって魅力的な事業

はどのようなものか分析し、期待に沿ったプログラムを企画する、あるいは放射線看護に関する用語集を作成するなどの案が出ました。また、新任の委員から、他の学会での学生・院生を対象とした若手会員の勧誘・教育プログラムも紹介されました。

今年3月で、東日本大震災発生後10年が経過しました。事故の健康影響について、原子放射線の影響に関する国連科学委員会(UNSCEAR)2020年報告書が刊行されました。

<http://www.unscear.org/unscear/en/publications.html>

日本放射線腫瘍学会から「放射線治療計画ガイドライン 2020年版」(4年ぶり改定)が刊行されました。

委員の活動としては、後藤委員が、米国ハーバード大学ウェザーヘッドの主催するパネル“Japan's Response to COVID-19”にパネリストとして参加し、震災に関連した保健師の活動について発表しました。(2020年10月14日)

<https://vimeo.com/468200126>

また、ICRP/JAEA主催の「原子力事故後の復興に関する国際会議ー福島及びこれまでの事故から学ぶ放射線防護の教訓ー」に参加しました。(2020年12月1日-18日)

<https://www.icrprecovery.org/about-jpn>

さらに、「2021年 福島県立医科大学「県民健康調査」国際シンポジウム」「県民健康調査の10年とこれから～福島のレジリエンス(回復力)に寄り添うために～」にシンポジストとして参加しました。(2021年2月13-14日)

https://fukushima-symposium.com/3rd_intl_symposium.html

福島委員は、茨城県庁および宿泊療養施設で、COVID-19陽性者の宿泊療養や軽症者の入院調整をしています。

(文責：別所遊子)

第10回学術集会のご案内

2021年度の日本放射線看護学会第10回学術集会は、COVID-19の影響を考慮し完全Web方式で開催することになりました。当初予定しておりました9月18日(土)と19日(日)はオンラインでの内容をお届けしつつ、講演や教育セミナー等は9月18日～10月17日の開催期間中にオンデマンド配信をさせていただきます。ご参加のみなさま方との交流や意見交換の機会は制限されませんが、ご移動の労なく、ご自宅等でお好きな時間にゆっくりご視聴いただくことができます。昨年に引き続いてのWeb開催となりますが、学術集会の新しい在り方を模索し、放射線看護に心を傾けるみなさま方の学術活動にお役に立ちたいと考えています。

テーマ：放射線看護のこれから

創成とサステナビリティ

会期：2021年9月18日(土)～10月17日(日)

Web開催

大会長：野戸 結花

(弘前大学大学院保健学研究科)

HP：<http://rnsj10.com/index.html?20201120>

【編集後記】

会員の皆様が企画した講演会や研修会等のお知らせなどもHP上に掲載することが可能です。HPにあるお問合せの宛先に情報をお寄せください。よろしく願いいたします。

広報・渉外委員会

桜井、作田、堀田、小山